

展開商品の一例

A:トラベル：婦人/紳士ファッション・ 雑貨・アクセサリー

テイストをトラベルなどカジュアルに寄せ、海外のラグジュアリーブランドが使用している素材や工場を活用し、メイド・イン・ジャパンが伝わるアイテムを展開します。



「伝統技術を世界に紡ぐ」
日本のみならず世界へ発信し、
職人と産業の未来を守っていく
技術と感性
各地

<MIZEN>

・展開アイテム：ストール、シャツ、スカート、着物ストール、着物ニットタイ

・JMCとして：

日本の12の伝統工芸の産地と職人にスポットをあて着物とニットを組み合わせ、パターンからおこした作り上げる”技術と感性”が素晴らしく、MIZENが掲げる理念と、高度な技術をもった職人の地位向上と産業の持続可能性を高めていくことを目指す姿に深く共感いたしました。

世界一絞り技法の多い
染めの産地有松から
世界へ羽ばたく伝統の姿

愛知県

<SUZUSAN>

・展開アイテム：コート、ワンピース、カーディガン、シャツ、ストール

・JMCとして：

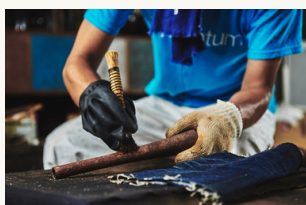
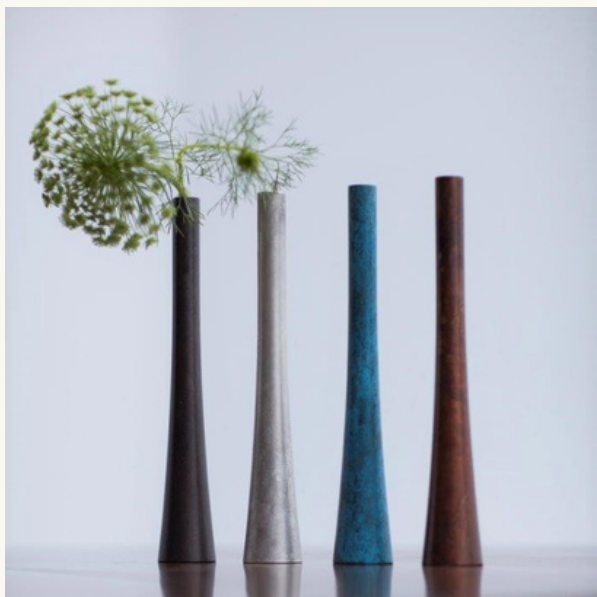
今から100年以上前、「鈴三商店」からその技は誕生し、第五代目の村瀬弘行さまが、友人と立ち上げたブランドがSUZUSANになります。

有松の地に於いて、長年の経験から熟練した職人と、その伝統を受け継ぎ、未来を目指す若手職人が、融合しながら、有松鳴海絞りの染色技術の伝統を守りながら、進化しています。季節で楽しめる服やストールを世界に一人でも多くの方に身に纏って欲しいと思っています。

展開商品の一例

B:上質な日常：陶器・器・キッチン雑貨

日常生活で使うことにより、生活が豊かになる、現代の生活様式に合った伝統工芸品などを展開します。



伝統着色技術を施し、
生活に調和と彩りをもたらす
銅製品
福井県

<モメンタムファクトリー・Orii>
・展開アイテム：置時計、名刺入れ、トレイ、一輪挿し、ぐい飲みなど
・JMCとして：
1950年に創業し、美術工芸品や仏具、銅像など、さまざまな銅製品の着色を手がけ、昔からの技術の継承だけに捉われずに現代に至り、素材と質の良さを醸し出し、海外の方の琴線に触れる”現代の生活様式にあったもの”として世界に発信したい製品です。

継承の技を持つ
数少ない職人による
技術とデザイン・繊細さを後世に
香川県

<讃岐かがり手まり>
・JMCとして：
温暖で雨が少ない土地ならではの、木綿の糸を草木染めした名産品で、讃岐地方の伝わる伝統の技を守り続ける「讃岐かがりてまり保存会」の活動に共感し、昔むかしの身近にあった手毬が、世の中に2つとないインテリアとしても素晴らしいと思っています。

展開商品の一例

C:趣味：装飾・鑑賞・アート作品

家の中で鑑賞したり、コレクションするものなど、楽しい気分になるような商品を展開します。



裕人礫翔(ひろとらくしろう)氏
京都西陣の箔伝統工芸士。建仁寺の風神雷神などの文化財の復元を担当。また1万分の1mmの薄さの箔を自在に扱う箔アーティストとして、世界各国で注目されている。

日本各地の粹を集めた
世界初の世界に1つの
アートチョコ
京都府

<箔伝統工芸士 裕人礫翔 氏>

食用の金沢の本金箔を「擦り箔技法」という伝統技法を応用。金箔を何層も重ね、漆の代わりに柔らかいチョコレートを用い、貼り合わせの柄が浮き出るように擦り込み柄を浮かび上がらせた作品。外器の銀器は京都迎賓館をはじめ各地神社仏閣の修復を行う、鋳屋八代目松田潔祀氏が担当。チョコレートは国内外様々なブランドチョコを担当するショコラティエ野口和男氏が担当。

・JMCとして：世界初の京都の伝統技法をチョコレートに応用しアートに昇華させ、世界に誇れる世の中に1つの繊細な作品になりました。



浅井 康宏 (あさいやすひろ) 氏
研出し蒔絵を中心に高蒔絵や螺鈿など多彩な素材・技法を駆使して作品制作を行う。蒔絵の伝統技術に真摯に向き合い、その上で現代的な意匠感覚を常に意識することで、時代の空気を未来に伝えることができると考えている。

日本の漆芸作家であり
蒔絵師が生み出す
華やかさと繊細の美
京都府

<京塗 浅井康宏 氏>

・JMCとして：
金の他に貝殻や多様な金属や宝石、鳥の卵の殻などを用いて描く蒔絵は、華やかさと繊細の美が美しさを超える超絶技巧です。吸い込まれるような鮮やかな文様。手のひらの小さな作品でも観る人が壮大さと深遠さを感じることができます。まだまだ奥深い漆の美を世界に向けて発信したい思いからお取り扱いをしております。

展開商品の一例

D:JAPAN LUXURY

日本を代表する人（デザイナー、クリエイター、作家）とのコラボレーションを中心としたJMCオリジナル商品を含めた商品を展開します。



デザイナー本間正章氏設立の
人気ジャパンブランド
MASTERMINDと
日本のものづくりの掛け合わせ

各地

<MASTERMIND>

・展開アイテム：印傳（革小物）、有田焼（徳利、お猪口、お茶碗、中皿）、讃岐漆器（カップ）、スカジャン、トレーナー、Tシャツ

・JMCとして：

とても品質に拘り、日本の各地の応援も手掛け、工場の負担にならないようにデザイナーの本間氏自ら全国を行脚し、地方創生のお仕事をしていることを敬愛し、今回コラボ商品をお願い致しました。

伝統的な印傳の柄や、白磁にストリーートの作風を取り入れたり、漆器など伝統的なものづくりとのコラボレーションが実現しました。

伝統工芸の後継者育成を支援し、古代、現代、未来を循環させる日本のものづくりを目指す

各地

<HIRUME>

・展開アイテム：コート、ストール、ワンピース、スカジャン、革小物、アクセサリ

・JMCとして：

日本の伝統工芸を守り、更に発展し続けようとする強い思いに共感し、また現代風にアレンジした大胆なファッションと感性がHIRUMEでしかできないと思っております。その思いを込めてJMCで販売致します。

展開商品の一例

プロモーション

オープン第一弾は、「日本の美術工芸を世界へ実行委員会」による特別展「ひかりの底」を予定しています。柑橋山美術館準備室長（小田原文化財団 江ノ浦測候所）を務める橋本麻里氏をキュレーターに迎え、変化し続ける「工芸」の最先端で活躍する作家、井本真紀（ガラス）、江里朋子（截金）、かみ添（唐紙）、誉田屋源兵衛（染織）、橋本知成（陶芸）、山村慎哉（漆工）の計6名による作品展示と販売を行います。

第二弾は、株式会社山本寛斎事務所と当社の共同のファッション企画「婆娑羅 BASARA」を予定しています。※婆娑羅：鎌倉時代末期から安土桃山時代にかけて流行した風潮をあらゆる言葉で、自分が何者であるかを表現する手段、民衆の命懸けの美意識（ファッション）を意味しています。

日本の美術工芸を世界へ

ひかりの底

HIKARI NO SOKO CAPTURING THE LIGHTS

プロジェクトについて

世界市場においてアート作品と同様に高く評価されている日本の美術工芸品。その国際的な価値をさらに高めることを目指す「日本の美術工芸を世界へ実行委員会」によるプロジェクト。同実行委員会は、アフターコロナで各国からの訪日が活性化し、さらなる成長が見込まれる日本の文化資源を体験する様々な文化観光プロジェクトを推進しており、昨年度は京都・大本山天徳寺塔頭宝厳院における美術工芸展などを開催。今年度は、観光庁観光再始動事業*の採択を受け、キュレーターに柑橋山美術館準備室長（小田原文化財団 江ノ浦測候所）を務める橋本麻里氏を迎え、品川区・天王洲にあるアート複合施設「TERRADA ART COMPLEX II BONDED GALLERY」で特別展『ひかりの底』（2023年11月1日～21日）を実施。国内外の多くのお客様から好評を博している。また、羽田未来総合研究所が運営する羽田空港第3ターミナル出国エリア内 JAPAN MASTERY COLLECTION のオープンに合わせて、同店舗ポップアップエリアで同展の開催を予定している。

美術と工芸の境界線もあいまいとなる中、変化し続ける「工芸」のあり方をとらえ、その変化の最先端にいる京都をはじめ日本で活躍する作家6名による作品展示と販売を行う。

キュレーションについて

ステレオタイプな『陰翳礼讃』に留まらず、影と表裏一体で存在し、むしろ光源そのものをさえ「かけ(影)」と呼ぶ、日本で育まれた「光」に対する感覚に注目。コンセプトを技芸の深みにも通じる「底光り」とし、平板な、明るいだけの光ではなく、和紙を透かすくぐもった不透明な光、闇を孕んだ光、無限の色を含んだ光、無彩色の光など、光の表現の豊かなバリエーションと、それを実現する多彩な素材や技法を紹介する。

底光り(そのひかり)

【名】うわべでなく奥底に光を宿すこと。

また、奥底に潜んでいるような光。

人柄、才情、技芸などが顕かれて深みのあるさまなどにもいう。

小澤篤（日本美術大講師）

*観光庁観光再始動事業

観光資源の復活に向けインバウンドの持続的な回復を図ることを目的とし、全関東を巡りて観光回復の起爆剤となる特設体験や期間限定の店舗等を自然、文化、食、スポーツ等の様々な分野で創出するとともに、全世界に発信し、インバウンドの持続的な回復を図る。

キュレーション：橋本麻里 展示デザイン：三井 崇

主催：日本の美術工芸を世界へ実行委員会

共催：京都府／一般社団法人関西イノベーションセンター／株式会社羽田未来総合研究所

協力：寺田倉庫株式会社／株式会社ランドリーム

BASARA

婆娑羅

BASARA

婆娑羅とは鎌倉時代末期から安土桃山時代にかけて流行した風潮をあらわす言葉です。広義には、「自身を誇示する格好で権威や体制に反撥し新時代を創造する者」といわれ、死を覚悟して戦に臨む戦国時代の武将たちが身に着けた絢爛華美な武具や家紋を配したオーダーメイドの甲冑のように、自分が何者であるかを表現する手段でもありました。この時代の武将をはじめ、民衆の命懸けの美意識（ファッション）が婆娑羅であり、当時の意匠は海を渡り、今も世界で息づいています。

現代の生活様式に目を向けると、必要最低限の機能を求めるのであれば、おそらくそのほとんどが無用となります。

それでも、心をワクワクさせてくれるものに、私たちは生きるエネルギーをもらっている気がしてなりません。

本テーマでは、着ること、飾ることが明日への生きる力となること、またそれらがものづくりに携わる人々の誇りにも繋がるということをメッセージさせていただきます。

私たちは、そういったお客様と作り手との関係こそが、ものづくりのあるべき姿であり、その積み重ねが伝統文化・地域産業に限らず日本のものづくりを守り、より発展させていくことだと信じております。